

1. 「福島県飯舘村の除染に尽カースマート農業で再生へ」を読んで。

溝口教授の取り組みを拝見し、真の研究者とは何かを改めて考えさせられた。多くの学者が理論や論文執筆に留まる中、教授は震災直後の 2011 年 3 月という最も困難な時期に、躊躇なく現地へ足を運んだ。この行動力こそが、研究者に求められる本質的な姿勢だと感じる。特に注目すべきは、放射性セシウムが土壌の粘土に吸着する性質を応用した除染技術の開発だ。現場で住民と対話し、土地の特性を理解し、実際に手を動かして検証する。このプロセスの中でこそ、真に有効な技術が生まれるのだろうと感じた。

さらに印象深いのは、除染という目の前の課題解決に留まらず、「最先端詰め込み『モデル』目指す」というビジョンを持っているということだ。単に元に戻すのではなく、より良いものを創るという発想の転換に感心した。NPO 法人の設立や継続的な講演活動を通じて、住民との信頼関係を築き上げてきた点も重要だ。科学技術だけでは地域は再生しない。人々の心に寄り添う姿勢があってこそ、真の復興が実現する。教授の活動は、研究者が社会とどう関わるべきかという問いへの、一つの明確な回答だと思った。

2. 「開発途上国における農業農村開発と DX」を読んで。

この論文を読んで最も衝撃的だったのは、「日本はもはや DX 後進国」という現実だ。教授が指摘するように、政府がデジタル田園都市国家構想を掲げても一向に進まない日本と、インドやインドネシアの急速な変革は対照的すぎる。しかし、この現状から逃げず、開発途上国から学ぶべき本質を抽出することこそが重要だと感じた。

特に印象に残ったことは、「リープフロッグ現象」の背景にある構造だ。規制が少ない発展途上国で革新的なアイデアが生まれやすいという指摘は、日本の停滞の根本的な原因を示唆している。日本では既存システムに依存する人が多く、新しい仕組みの導入に対する抵抗が大きい。一方、開発途上国では既存システムが存在しないからこそ、最新技術を直接導入できるということが分かった。また、論文で紹介されているタイやインドネシアの起業家たちが、学生時代から「農業×IT」に関心を持っていたという点は、教育と起業文化の違いがはっきりしている。日本では農学部の学生が起業を目指すケースは稀だ。これは単に保守的な文化だけでなく、課題解決型の教育が不足しているからではないかと考える。開発途上国の若者は、目の前にある深刻な社会課題を、自らの技術で解決しようという強い動機を持っていることが分かった。日本が DX 後進国から脱却するには、教授の言う通り「社会や教育システムそのもの」の見直しが不可欠だ。しかし同時に、開発途上国の成功事例から謙虚に学び、既存システムにとらわれない柔軟な発想を持つことが求められている。